
空を飛ぶなら二人きりで

夜光 沙羽 @恋と悲劇は紙一重

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空を飛ぶなら二人きりで

【Nコード】

N2316Z

【作者名】

夜光 沙羽 @恋と悲劇は紙一重

【あらすじ】

今日はアリスの記念日。何の記念日だったかは覚えていない。そんな日にもやっぱり魔理沙はやってくる。……だが、今日の魔理沙はどこかがおかしくて……？

上（前書き）

始めましての方は始めまして。いつもの方はまたかよお前となっているでしょうか。

夜光沙羽です。

今回は私自身初めて恋愛小説を書いてみようという試みです。ついでに描写もちょっとだけ深くしてみました。

そうしたら短編とはいえない短編になってしまったので短期集中連載という形に。

以下ご注意ください。

?この小説の中の幻想郷は私の幻想郷です。いかなる批判を頂こうとも内容改変は有り得ません。

?よって、魔理沙ならびにアリスのキャラクターがあなたの好きな設定とは違っている可能性があります。

この二つに耐えられないと思う方は右上の×ボタンを押していただくか左上のボタンを押すことを強く推奨いたします。

この二つでも別にかまわないよという方はどうかごゆっくりご観覧いただければ幸いです。

上

「あら、魔理沙じゃない」

「きつと勘違いだぜ」

「そう、それは悪かったわね。さようなら」

「ああお気をつけてだぜ」

アリスは人里へと買い物に行こうとしていて、家を出た矢先、自称普通の魔法使い、否、魔砲使いの霧雨魔理沙と出会った。

しかしながらアリスは魔理沙がやや苦手である。この様に突然意味もない嘘を試いてみたりとどうも自分のことを実験動物にしているのではないかと疑う程だ。

魔理沙は満面の笑みを浮かべているが、対してアリスは渋い顔。

そしてめざとい魔理沙はアリスの腕にかかっているかごに気づくのであった。

「お、なんだなんだ？ 買い物か？ 付き合っぜ」

「あら、見ず知らずの方に手伝っていただくのは失礼だわ」

「酷いぜ」

この世は神も仏もアリスもいないんだぜと大いに嘆く（フリをする）

のだからアリスは仕方ない、厄日だと割りきって構ってあげる事にした。

「どこがひどいって言うのよ。で、用があるんでしょう？」

「ないぜ」

「……はい？」

しかしその返答はアリスの想像の右上に大きくぶっ飛んでいた。

「あ、そう。用はないなら帰りなさい」

「おいおい、客に対する態度じゃないぜ」

表面上はクールなアリスだが、内心苛々し始めていた。

早く買い物に行きたいのだ。

今日は自分の記念日。なんの記念日だったかは忘れた。

長く生きているので、そういった記憶はどんどん薄れ行くのが運命さだめである。

それでも祝いたいのだ。自分の微かな記憶が大事な日であると言う情報を教えてくれる。

それ故に今のアリスにとっては魔理沙は只の邪魔な存在でしかないのだ。

「一寸、いつまでいるのよ。買い物に行きたいんだけど」

「ついてくぜ」

「何だよ。あんたは関係無いでしょうに」

とっとと歩き始めたアリスに合わせて魔理沙は箒を担いで隣にたった。何よ、と聞けば、

「暇なんだぜ」

「紅魔館でも行って本を盗み損ねてお仕置きでもされてくれれば？」

「盗んでいるんじゃない。借りているだけだぜ」

この返答を何千回聞いたことだろうか。紅魔館で異変が起こってから6年、毎日こんなことを言っている気がする。

人間年齢で言えば19歳は十分大人なはずなのだが、背も伸びず胸も育たず、あげくの果てにはこの調子である。

ただ、大人の色気と言うのだろうか。そのようなものが出てきたと人里の一部では人気になっているらしい。同性であるアリスでさえたまについドキツとする事もあるほどである。さぞかし異性には人気であろう。変わり者とはいえ人間だし。

異変解決の三大スペシャリスト。そうとも呼ばれるようになってきたが、霊夢は天才、早苗は早苗なのに対し、魔理沙のみは努力でここまでこまでのしあがってきた。

アリスもそれには舌を巻く。いつでも本気でどこでも全力な彼女は、努力すら全開なのである。

アリスは盗みたかった。が、全く盗めそうになかったので諦める。

彼女は魔理沙と違いどうやら盗みは苦手のようであった。

でもそ

抑魔理沙はというと何故か紅魔館から本は盗むし香霖堂から物は盗むし、あげくの果てには人の心まで盗むと言われているルパン顔負けな大泥棒らしいが、決してアリスの前では実行しなかった。それだけが彼女にとって不思議なのであった。

しかし聞いてしまつのも何か憚れる。結局のところ疑問は自分だけでしまつているのだ。

そんなことは置いて
閑話休題。

「まあ良いわよ。あれ買ってとか言ったら怒るけど流石にそこまでしないでしょうし」

逆にここらで折れないといつまでたつても迫ってくる可能性がある。アリスは深い溜め息をついて魔理沙の同行を許可した。

「子供扱いしすぎだぜ。私だってそこまでしないさ。

『買わない？ マスタースパークなんてどうだ？』って言うぐらいで」

「上海、縄」

「シャンハイ」

「ちよ、やめろ、馬鹿！」

アリスは再びすたすたと歩き出し、彼女の人形である上海人形は魔理沙を縄で縛ろうとしていた。

「こら止める！ 止めろって！ こいつ！ なに縛りさせるつもりだ！？」

「亀甲縛り」

「洒落にならないからやめてくれー！」

「うう、ひどいぜアリス」

本当に恨みがましい目で見られたので流石にやり過ぎたなと少し反省するだけでアリスは買い物に向かうことにした。

「あ、こら、待て！」

帽子を深くかぶり直して彼女は追いかけるのであった。

「あーあ」

「む、さっきまでは快晴だったのにな。また天人が何か起こしたか？」

さっきまで、ついさっき八百屋に入ったときは快晴だったのに、3分でこの有様である。

見事なまでの土砂降りであった。

それは魔理沙でなくても再び天子が気質を操っているのかと心配にもなる。

それも何年前のことになるうか。確か二年程前であったか。博麗神社が崩壊し、それによって霊夢が死の危機に直面した。そのため紫がブチギレ、首謀者の比那名居天子をフルボッコにしたのである。とまあ人里からとってはすべてが蚊帳の外過ぎて何が起こったのかさっぱりわからんという異変であった。

それはともかく、そんな二人だから当然傘なぞ持っているはずがなく。雨が止むまで八百屋で佇んでいるしかないのである。

ここにあるというたった一本の傘は母親が息子を迎えに行き、使っているため、ない。貸してもらおうことも出来ないのだ。

「悪いなあ魔理沙ちゃん、アリスちゃん」

「ほんとだぜ」

「こら魔理沙！ す、すみませんなんかこっちも勝手に軒先お借りして」

まるで娘と母親である。奇しくもこの三人は同じことを思っていた。感情は慈愛と不満と迷惑と、てんでばらばらだったが。

不満な様子を隠そうともせず「雨だぜー帰りたいぜー寝たいぜー」とぶーぶー言っている魔理沙に苦笑しつつも八百屋の主人は言う。

「いや構わねえよ。雨が止むまでしばらくゆっくりしていきな。…

…まあ夕立って言ったところかなあ。この時期は多いんだよ」

「はあ、夕立ですか……」

気候条件が合わないのか基本的に魔法の森には通り雨や夕立といった類の雨は降らない。魔理沙が無理やり追い払っているという説もあるが、彼女ならやりかねないと思っっているアリスであった。よってアリスが夕立にあうのは久しぶりであった。もともと余り人里には来ないのだ。来たとして買い物か人形劇。月に3度来たら多いほうである。そんな彼女のことだ、逆に人里で通り雨などにあうことの方がかなり珍しい。

やっぱり厄日なんだなあ、と一人結論をつけ、アリスはため息をついた。

「お、どうしたアリス？　ため息をつくとき幸せが逃げるぜ」

「……いや、いいわ」

よっぽどためえのせいやこのやろうやんのかコラぶつ殺したと言いたかったアリスであるが、もはやそんな気力もなかった。何か言いたそうな顔で魔理沙を見下ろし、ため息混じりに免罪符を押し付けたのである。早く家に帰って記念日を祝いたい、そう思ったら再びため息が出た。

「はあ」

「……。本気で迷惑なら帰るぜ」

心配そうな顔でこっちの顔を覗き込んできた魔理沙に、ちよつと苦笑してアリスは答える。

「いいわよ別に。そこまで迷惑してるわけじゃないわ」

本当だ。迷惑だ迷惑だ思いつつも、魔理沙と一緒にいるのが楽しいと感じるアリスである。この二つは矛盾せずに彼女の心の中にあつた。

アリスは常に自分の最高の目標、自立式人形を作成するために研究していて、気づけば3日経っていたということもざらであった。

そんなときにふと横を見てみれば魔理沙がいる。いつの間にと問えば2日前からと返す。

アリスはたいそう呆れたものだ。よくそんな暇な時間過ごしているわね、と。

そんなことが数度あってから、彼女は研究にすべてを注いでいてもふと暖かくなるのを感じる様になった。魔理沙の視線だ。その瞬間が彼女にとって、楽しいひと時と感じられるようになった。

研究に没頭していないときでも彼女はちよくちよく家に遊びに来た。なぜと問えば返ってくる答えはいつも同じだった。

「ここが一番私にとってしっくりくるんだよな」

はあ、とため息をつくアリスだが、それならばわざわざコーヒーなんて出さなければいいのとは魔理沙の弁。そんな毎日がたまらなく心地よかった。

大喧嘩した時もあった。キャッツファイトに発展したこともあった。それでも、その時は大っ嫌いだと思っただけでも、今となっては二人とも苦笑いできるような思い出話になっている。それは親友なのではないか、そう思うアリスであった。

お互い同じ気持ちだろう。相手という飽きない。もつと一緒にいたい。いてくれれば何かほっこりする。そうアリスは確信していた。

去年だっただろうか。自分の一番のお気に入りである上海人形と蓬莱人形が自立に成功したのは。温度、湿度、魔力、気候、日にち、時間、周期などの値が一致しなければ同じものは作れないだろうとアリスは確信した。

ふう、と達成感もそんなにないままに息をつくと、横に向かって声をかけた。

「魔理沙、どうせいるんでしょう？　今から夕飯の支度するから、座って……て？　魔理沙？」

どんと抱きついてくる。アリスは思わず「おうっ」となんととも女の子らしくない声を上げてバランスを崩し、仰向けに倒れこんだ。上に抱きついていて魔理沙は肩を震わせていた。ぱつと涙でぐじゅぐじゅになった顔をあげ、魔理沙は言った。

「良かったな……！　長年の目標がかなったんだぜ！？」

「……何よ、魔理沙が泣くことないじゃない」

クスリと苦笑してアリスは魔理沙の頭をなでた。

「お前の目標の達成は私の目標の達成だぜ！　良かった……おめでとうアリス……わああああああああん！！」

その大泣きにアリスもジワリと来た。左目からつーつと一滴涙が流れる。ぎゅーつと魔理沙を抱きしめ、つぶやいた。

「ありがとう、魔理沙。」

「わああああああああああああん!!!」

自分で考え自分で行動するようになった上海と蓬萊は、そろそろとこの場から立ち去った。

その晚いつの間にかできていた料理はひどく壊滅的なダークマターであったという。

そんなことを思い返しながら、アリスは空を見上げる。もうだいぶ雲の間に切れ間ができていた。

「ん、もうすぐだな。もうすぐ止むぜ。そしたら迷惑じゃないアリスの元に出向いてキノコ料理でも進ぜよう」

座り込みながらにやっと笑う魔理沙。

「はいはい。好きにきなさいよ」

心ではあんなことを思っているながらも自分の口のなんと素直でないことか。アリスはそんな自分に思わず苦笑した。

「ん、何がおかしいんだ？」

「何でもないわよ、八百屋さん、ありがとうございました」

「ああ、別に気にしなくていいよ。ま、その代わりといっちゃ何だが今後も鼻屑にしてくれよ?」

がっはっはと笑う八百屋の親父さんにアリスも自然と笑顔になる。

「ええ、野菜を買うときはこちらにお邪魔させていただきませぬ」

「む、アリス、もう晴れたみたいだ、行くぜ」

話に割り込むかのように魔理沙がアリスの手をつかんで引つ張る。おとつと、と言いつつされるがままに引つ張られるアリス。それをニコニコとした笑顔で見送る親父さんであった。

「なあアリス、珍しいな笑顔になるって」

「あら、そう? 面白かったからかしらね?」

と言うか自分そんなに無表情なのかなあ。そうやや落ち込む彼女に魔理沙は呟く。

「……私と一緒にいるときはあまり笑わないのにな」

「え、何か言った?」

なんでもない、とぶっきらぼうに言う魔理沙にアリスはふーん?と一言発しただけであった。

「……………」

魔理沙は、彼女にしては珍しく無表情でアリスを引つ張り続けてい

た。

「ちよ、ちよっと魔理沙あ……痛いって……そんなに強く腕引つ張らないでって」

「……」

アリスは痛みに顔を歪ませながらも歩いてゆく。魔理沙はそれにも留めずにそのまま歩き続けていた。

「もう！ 何なのよ一体。一体何が目的なのよ？」

ぱつと手を振りほどき、さすがにイラついた表情でアリスは魔理沙を見据える。しかし、すぐに驚愕する。それよりももっとイラついている表情の魔理沙が眼光鋭く見据えていたからだ。

「ちよ、……何……」

アリスはその表情に委縮する。あまりの怒りを目の当たりにして。

「……なんか気に入らないんだよな」

吐き捨てるようにして魔理沙は言う。視線をアリスから逸らし、左下に生えている一本のキノコに向けた。それをもぎ取り、目の前に透かしつつ、魔理沙は続ける。

「何か、今のお前が気に入らないんだよ、私は」

「……どういうことよ！勝手に怒って、勝手に気に入らないって！私が何をしたって言うの！？」

さすがに温厚なアリスも今回ばかりは『切れた』。当然であろう。勝手に怒りをぶつけられて、その拳句お前は気に入らない。それで怒らないほうがどう考えてもおかしいであろう。

「……帰るから。もう、来ないで」

絶交宣言はアリスからだった。魔理沙はそれを黙って聞いている。それも、アリスの苛々を募らせた。

「何？もう来るなって言われてそれをそのまま受け取っちゃおう！？」

「……」

バシッ！

魔法の森に乾いた音が木霊する。

目に涙を浮かべてアリスは叫んだ。

「せつかくの記念日が、あんたのせいでッッ!!」

叩かれた頬を押さえることもせずに魔理沙はぼそりと呟いた。

「……行けよ。どうぞご自由に」

「言われなくても! もう二度と私の前に姿を現さないでッッ!!」

アリスは流れ落ちる涙を拭おうともしないままに早歩きでその場を去る。上海と蓬莱はそんなアリスの周りを心配そうにぐるぐる回っては顔を確かめている。

そのままうつむいている魔理沙をよそに時は経ち、アリスの気配はこの近辺から完全に消え去った。ガクツと、足の力が抜けてそのままその場にへたり込む。

「……言えるわけ、ないじゃないか」

ドカツと、キノコを地面にたたきつける。キノコはその衝撃をすべて受け止め、バラバラになった。

「アリスが楽しそうに話してるのを見て、嫉妬したただなんてさ」

魔理沙らしからぬ弱気な声を上げてから、彼女はそれを振り払うかのように首を大きく振った。そして気合でも入れるかのように両頬をぱしんと叩く。

さっきとは全く違う痛み。アリスに叩かれるのと自分が叩くのでは、シヨックの度合いが違いすぎる。

「まあ、でも当たり前だよな」

叩かれて当然だ。『アリスが気に入らない』と、勝手に、一方的に拒絶したのはこっちだ。

自分では拒絶したわけではないことは痛いほどよくわかっている。しかしこうやって冷静になってみれば、急に態度が豹変して、罵詈雑言をぶついただけとしか思えない。

「謝って許しては……くれないだろうなあ……」

なら、正攻法じゃなく裏を取るのが私らしいやり方だ。そう結論付けた彼女は立ち上がる。

「あつと驚かせてやるぜ」

筭に乗り、彼女は超特急で自身の家を目指すのであった。

上（後書き）

感想ならびに誤字脱字、意見をいただければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2316z/>

空を飛ぶなら二人きりで

2011年12月9日01時09分発行